



守護霊



川崎ゆきお

「錯覚や見間違いや、まあ、幻覚とかではなく、本物がほしいですねえ」

怪奇作家黒田は、読者からそう言われた。三村というその読者は、黒田の高校時代の先生だった。そのころから白髪の人なのだが、今もそのままの姿だ。

二十年ぶりに再会したが、あのころの印象と変わらない。ということは、年を取らなかったのではなく、最初から老けていたのだ。

高校生のころの黒田から見れば、老人に見えたのだが、実はまだ若かったのだ。

黒田が怪奇作家になったのは、この三村先生の影響だ。

オカルト現象に詳しい先生で、古典の授業中、幽霊の話ばかりしていた。他の生徒はつきあいで聞いていたのだが、黒田は本気になって聞いた。

あの世とか、四次元や五次元の世界を語り、千里眼で、過去や未来を覗ける方法などを語っていた。

それを授業中にやっていたのだから、今考えると、のんきな時代だ。

「錯覚が多いんだよね。具が出てこない」

三村先生は、不満点を述べる。

「なかなか神秘的なものは書けなくて」

「死後の世界は存在する。だから、幽霊も出る」

「はい」

「それを書いてもらいたいんだがね。君の場合、そこまで踏み込んでいない。それを避けているのかね」

「いえ、フィクションですから」

「君の小説を読んでいると、幽霊は存在しないことになっている。一度だって出た試しはない。それなのに幽霊談を書いている。だが、それらは錯覚で、思い違いだったとか、トリックだったりする。それが不満でね」

「そうですか」

「君は幽霊を信じていないのかね」

「見たことないですから」

「そうか」

「それに小説で本物の幽霊を出すと、それは嘘になります」

「なぜかな」

「だって、小説はフィクションですから、あり得ないことを書いてもいいんです。だから、嘘を書いてもいい。そういう場所で書くと、嘘を書いたように見られるのです」

「なるほどねえ」

「作り話だと思われます。実際には小説は作り話なので、それでいいのですが」

「一度幽霊が出てくる嘘の話を書いてみなさい」

「はい」

「すると、小説の中に本物の霊が集まってくる。そのとき大事なのは、君の背後霊だ。守護霊だ」

「高校の時、先生に見てもらいました。僕の守護霊を」

「そうだったか」

「はい。遠い先祖らしいです」

三村はじっと黒田の体の輪郭を見ている。体と背景の境目だ。背景は三村の書斎にある本棚だ。

「ああ、見えるね。お百姓さんのようだ」

「二十年前もそうでしたか」

「それはもう忘れたよ」

「君が幽霊を書けないのは、君の守護霊が邪魔をしているようだ」

「それは僕の先祖でしょ」

「そうらしい」

「誰か分かりませんか」

「私が見ておるのに、無視しておる」

「僕の守護霊がですか」

「そうだ」

「じゃ、きっと守っているのでしょうか」

「何から」

「だから、幽霊のことを語ってはいけないと」

「そういうことなら、仕方がない。守りたい何かがあるのでしょうか。これで、理由が分かったので、もう本物の幽霊を書けとは言いませんよ」

「納得していただいて恐縮です」

「私も長く心霊術をやってきたが、あまり役に立たん」

「そうなんですか。僕は先生の神秘的な話を聞いて、怪奇作家になったんですから、役に立ってますよ」

「そうかい。ありがとうよ」

了